2006年度ラオス北部のフィールド調査日記 (1) —少数民族アカの村における記録—

横山 智

YOKOYAMA Satoshi

I はじめに

2006年12月末から2007年1月初旬にかけて、ラオス北部の少数民族であるアカとカムの2つの村で14日間の調査を実施した。本稿は、調査期間中、就寝前にフィールドノートに書き留めた調査日記である。

なぜ10年以上も前の調査日記を公開することにしたのか、その意義と必要性について、最初に若干の説明を加えておきたい。

中国の経済力が高まった2000年代以降、中国と国境を接するラオス北部では多くの中国企業が進出してきた。その中国の経済進出に最前線で対峙していたのが、この日記で取り上げるようなアカやカムといったラオス北部の少数民族の人々である（横山2014）。この日記を書いた2006～07年は、目に見えるような、社会、経済、土地利用の変化が起こっていた時期であった。こうした激動の時期に、短い期間ではあるが、そこに居合わせた外国人である筆者が、彼らと共に調査をして感じたことや人々の日常生活を記録したのが、本稿で公開する日記である。

研究者がフィールド調査の成果を公表する場合は、主として学会発表、学術論文や学術書などである。しかし、発表時間が15～20分程度しか得られない学会発表や原稿の文字数が限られる学術論文では、研究テーマと関係のない記述は捨象せざるを得ない。とりわけ人々の日常生活の様子などは、論文で記されることはほとんどない。そして、学会発表を行い、論文を執筆した後には、調査村に訪れることもなくなり、やがて記憶に残るような印象的な出来事以外は、忘れ去られてしまう。論文や書籍の中で生き続けるデータがある一方で、現地の人々の日常は、記録されることもなく葬られてしまうのである。

しかし、10年以上前に記録した日記を読み返すと、

論文や学術書では決して記されることがない人々のリアルな日常や筆者が現場で感じたことなどが綴られていた。それは、研究テーマとほとんど関係がないことばかりであるが、人々の生活や文化を理解するためには必要な資料であるし、外国人が異文化の中でどのようにフィールド調査を行ったのかを知ってもらうことにも役立つだろう。また、当時と現在との時系列的変化を考察するための地域研究や地誌の資料としても貴重なものである。したがって、この日記を公開することに対して、学術的な意義も付与できるはずである。

さらに、本稿に記したH村に関する日記は、すでに発表している落合・横山（2008: 311-348）、そしてM村に関する日記は、横山・落合（2008: 369-394）の論文と完全に連動している。これらの論文と共に本稿を参照することで、より一層、調査地の人々の日常生活と実施した調査内容に対する理解を深めることが可能となる。

本稿は、フィールドノートに書きとめた日記をそのままテキスト化したものである¹⁾。ただし、分量の関係で、原稿を2本に分けた。1本目は、アカの村であるポンサーリー県H村で2006年12月27日から2007年1月4日午前中まで実施した9日間のフィールド調査日記で、それが本稿「2006年度ラオス北部フィールド調査日記 (1)」である。2本目は、カムの村であるウドムサイ県M村で2007年1月4日午後から1月9日までの実施した6日間のフィールド調査日記で、「2006年度ラオス北部フィールド調査日記 (2)」として改めて報告することとしたい。

II 調査内容および調査地

調査は、総合地球環境学研究所の研究プロジェクト4-2「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態

図1 研究対象地域
(米国地質調査所 GTOPO30 デジタル標高データを用いて作成)

史の統合的研究：1945–2005」(プロジェクトリーダー秋道智彌)のメンバーとして実施したものである。現地調査は、民族植物学が専門の落合雪野さん(龍谷大学農学部教授)、そして現地カウンターパート機関であるラオス農林省のThongsavanh KEONAKHONE(トンサワン)さんと共に実施した²⁾。

調査地のボンサーリー県H村とウドムサイ県M村の位置を図1に示す。本稿は、H村で調査した時の日記を扱うので、ここではH村についての概略を記す。

H村は2006年末時点において、43世帯、53家族、290人が居住していた。住民はアカ・ニャウを自称する。アカ・ニャウは、チベット・ビルマ語系のアカ語のサブ・グループである(Chazée 1999: 138)。村はボンサーリー県の県庁所在地ボンサーリーとウドムサイ県の県庁所在地ムアン・サイとをつなぐ国道4号線沿いに位置し、国道から急な坂を20分ほど歩いた丘の上に位置する。

H村には、調査地選定のために2003年9月に初めて訪れ、その後、2004年8月と2005年8月に調査を実施した。日記を記した2006年12月～2007年1月の調査は、研究プロジェクトの最終調査として訪れた時の記

録である。研究目的は、伝統的な焼畑を実施している村の植物利用を住民の環境認知との関係から明らかにすることであった。そのため、村内のどのような植生から、どのような植物を採取し、住民がどの程度の有用植物に関する知識を有しているのかを調査した。さらにGPSを持って森林を歩き回り、住民が述べた有用植物が実際に生育しているかどうかを確認し、その位置を記録した。

III ボンサーリー県H村でのフィールド調査日記

1. 2006年12月27日(水)

7:30にムアン・コアのゲストハウス前でトンサワンさん、落合さんと待ち合わせる。市場の食堂にカオピヤック³⁾を食べに行く。市場では、コウモリがそのまま、そしてタケネズミが開かれた状態で売られている。宿に戻り、荷物を持ってバス乗り場に向かう。すでにバスには人が乗り込んでおり、座席がほとんどない。とりあえずチケットを3人分買い、荷物をバスの屋根に載せて、座席を確保。チケットは11,000キープ/人(当時のレートで約110円/人)。トンサワン

さんと落合さんは席に座れたが、私は通路の米袋の上に座る。

途中のラートサンで定期市が開かれているのを見る。人がたくさん集まっていたが、バスに乗る者はいない。約1時間後、パーク・ナムノイに到着。小休憩。人々が小さな売店で何かを買いこむ。約10後、バスは出発。この時、バスの運転手にH村で降りることを告げておく。出発して5分もたたないうちにH村の入口に到着する。

何人かの村人が、新しく建てられた倉庫にいた。顔見知りが多く、村長の家に住む甥の嫁もいた。この倉庫には米が保管されている。7月に建てられたばかりだという。毎日、誰かが倉庫番として寝泊まりするらしい。男3人が銃を持って猟に出かける。川を筏で渡る姿が見える。30分ほど待ってから、村へ向けて出発。荷物が多いため、村人5人が私たちの荷物を分けて持ってくれる。途中、約5分の小休憩を取り、村に到着。

早速、村長の家に荷物を置く。しかし、村長は第一夫人⁴⁾が病気でムアン・サイの病院に行っており不在。10日間も戻ってないという。いつ帰ってくるのかわからない。とりあえず、村長の家で寝泊まりするのは問題ないということで一安心。調査は、副村長が担当してくれることになった。

去年は、いつ建つかわからないと言っていた小学校が、今年建ったらしい。皆で見に行くと、村を見下ろす最上部に真新しい白壁モルタル造りの小学校が建っていた(図2)。複式学級で小学1年が1教室、小学3年と小学4年が1教室の計2学級だ。小学2年は児童がいないため教室がない。来年、小学5年をつくるらし

い。先生は郡庁所在地のムアン・コアから2人来ており、空き教室に住んでいた。彼らはアカ語が話せない。村人とはラオ語でコミュニケーションしている。そのうち1人と話をしたら、任期は約3年だという⁵⁾。

その後、村に雑貨店ができたというので見に行く。見かけは単なる普通の家である。中に入ると、タバコ、キャンディ、ビール、ラオ・ラーオ(米焼酎)などが寝床に並んでいた(図3)。ほとんどの商品はパーク・ナムノイから仕入れ、少しだけ高い値段で売っている。利益はそれほどない。商品運送のための労働費くらいであろう。

簡単な昼食をとってから、全世帯の世帯主の名前をノートに記した。全部で43世帯であった。昨年より3世帯増加している。そして、日本で作成してきたインタビューシートを使って試験的なインタビューを副村長に対して行った。しかし、インタビューを開始して2時間経っても、インタビュー項目の半分くらいしか終わらなかった。時間切れ終了。インタビュー項目を減らすことにした。ノートPCで修正をしていると、人だかりができる。更にモバイル・プリンターでそれを印刷し始めると、どよめきが出る。とりあえず、明日のために10セットだけ印刷。

夕食後にパラゴム植林の話になった。村に来る途中に木を伐採して整地された土地があり、そこにパラゴムを植えるという話を聞いたからである。それは、村長の土地だという。最近、ラオス北部では中国の会社との契約栽培が増加している。北部の森林事情に詳しいトンサワンさんが村人にいろいろアドバイスをしている。話を聞いていると、中国の会社との契約はかな

図2 新しく建設された小学校

図3 村の雑貨店で売られている商品

りリスクが大きい。初期投資は必要ないが、もし苗木を枯らした時に支払わなければならない額が大きいと説明する。村人が真剣に聞き入っていた。

8時半に就寝。小川に設置した水力発電機⁶⁾で電気がずっと灯されており、夜になっても消えない。電球1個だけだが、明るいと寝づらい。この日はとても寒い。寝袋と掛け布団、そして靴下、ズボン、トレーナーを着たまま就寝した。3人で川の字に寝る。私と落合さんは寝袋を持参したので温かく寝られたと思う。トンサワンさんはセーターを羽織って寝る。

2. 2006年12月28日（木）

7時起床。村は真っ白な霧に包まれている（図4）。間もなく村長第2夫人がお湯をポットに入れてくれる。ムアン・サイで買ってきたインスタントコーヒーを飲む。副村長らといっしょに朝食をとる。

全村民に対して、新しいインタビューシートで調査をすることになった。Hさんという46才の女性にインタビューを開始。彼女はラオ語が分からない。質問票は英語で作成しているので、トンサワンさんがラオ語で聞き、副村長が更にアカ語に訳して質問する。彼女からアカ語で返ってきた回答を副村長がラオ語に訳す。私はそのラオ語を聞いてノートに記していく。1人終了するのに約1時間半を要した。

2人目以降は、トンサワンさんと落合さん、副村長の3人が1つのグループとしてインタビューを行い、私は1人でインタビューを行うことにした。私がインタビューを行うGさんは村で唯一の林産物仲買人で、ラオ語もわかる。しかし、インタビューを始めると、

質問の意味を理解してくれない。ラオ語の問題でないことに気が付く。私の説明が悪いらしい。仕方がないので、副村長に説明してもらいながらインタビューをやった。

午後からは、午前中のインタビュー結果を踏まえて、更に質問事項を絞り込んだ。そして、アカ語の通訳として、以前の調査でいっしょに森に入ったKさんが加わった。私はKさんと一緒にインタビューを行った（図5）。本格的な調査の開始である。場所は村長宅の軒下で、小学校から使用していない机とイスを持ってきて実施した。夕方、ノートPCで調査票を修正し、とりあえず明日必要となる分だけプリントアウトした。また、子供たちに取り囲まれる。

この日は、とにかく寒かった。水浴びはしない。昨日も水浴びしていないので、2日間も身体を洗っていない。この寒さで水浴びをする気にはなれない⁷⁾。

夕食前に、3人でこれからの調査をどうするかを議論するが結論は出ない。知っている植物を全て挙げてもらうのが一番よいが、その方法だと何日かかっても終わらない。とりあえず、世帯単位で利用している植物を場所ごとに3種類ずつ答えてもらう方法を継続することにした。それでもあと丸3日はかかりそうだ。

夕食にはイノシシの肉が出てきた。この村で肉が出るのは珍しい。すごくおいしかった。夜は、何もすることなく8時半に寝る。昨日よりは暖かい。寝ていたら、「ウソつきおじさん」⁸⁾がトンサワンさんのところに来て話し始めた。ラオ語だったので何を話しているのかほとんど分かった。近いうちにドイツ人ツーリストが村に来るという情報であった。パーク・ナムノイ

図4 H村の朝の風景

図5 インタビューの実施

で、観光ガイドと会った時に、そう言われたらしい。この村にも、観光化が訪れようとしている。

3. 2006年12月29日（金）

朝7時に起床。村は霧に包まれていた。朝食後、コーヒーを飲み、すぐにインタビューを開始する。10時頃、突然、村長がムアン・サイから帰ってきた。第一夫人も一緒だ。回復したと言うが、昨年と比べると、ひどくやつれていたのが驚いた。

昼間は太陽が出て、久しぶりに暖かく、半袖でも大丈夫な気温だった。昼食後、2日ぶりに水浴びをして、洗濯もした。水はすごく冷たいが、気持ちいい。インタビューは順調に進み、私のグループは1日で8世帯、トンサワンさんと落合さんのグループは6世帯が終わった。この調子だと年内にインタビューが終わりそうだ。

結局、このインタビュー内容で最後まで実施することにし、残りのインタビューシートを印刷。村に来て3度目の印刷でまた住民に取り囲まれる。

今日は、村長と第一夫人が無事に回復して戻ってきたので、帰宅を祝うためのパーシー⁹⁾の儀式が夕方から村長の家で行われた（図6）。インタビューの途中で何度もブタの悲鳴が聞こえたが、そのブタはこの儀式の料理のために屠られたのである。料理は、ブタのスープ、茹でブタ、ブタ炒めなど、ブタばかり。昨日のイノシシから、この2日間はずっとブタである。

夜は遅くまで、お酒を飲んでいた。私たちは途中9時頃に寝たが、宴会は続いていた。夜中に一度目を覚ましたが、まだ村長らは何か話し込んでいた。

図6 マット・ケーンの儀式の後の食事

4. 2006年12月30日（土）

朝7時半に起床。暖かったが、うるさくてよく寝付けなかった。起きるのが辛かった。朝から村長の甥の嫁が紡いだ糸を揃えていた（図7）。地面にそのまま置いて作業しており、その上をイヌやブタが歩いている。汚くなりそうで見ていて心配になった。

朝8時45分からインタビューを開始する。インタビューのスピードが上がり、午前中だけで5世帯が終了する。この日も曇っていて寒いので水浴びをする気になれない。落合さんも水浴びをしない。しかしトンサワンさんだけ、がんばって水浴びをした。見ているだけで寒そうだ。ラオ人は日本人よりきれい好きなのかもしれない。

午後のインタビューでは、興味深い植物が出てきた。チーグというつる性の多年草¹⁰⁾で、その樹皮を使って漁で使う網を編むという。その網を見せてもらったが、まさしくナイロンの糸のようである（図8）。その植物を見て網にしようと思った最初の人はずいぶん。

図7 紡いだ糸を巻き付ける女性

図8 チーグの樹皮で編んだ網

図9 夕食に出てきたゴルアパの葉

夕食には川のりが出てきた。近くの小川で採れたもので、叩いて平たくしたものに、塩、味の素、ゴマをまぶす。酒のつまみとしてもいける。加えて、ゴルアパ（図9）という木の葉¹¹⁾が出てきたが、これもインタビューで何度も出てきた植物で私たちは「おー」と歓声をあげた。味は葉っぱの味である。そうとしか表現しようがない。しばらく噛んでいると少し苦くなる。

夕食後は、特に何もなく8時半に床につく。いつもより暖かく感じたのでトレーナーを脱いでシャツで寝た。それでも寝袋があったので暑くて汗をかいた。

5. 2006年12月31日（日）

大みそか。朝7時半に起きると、信じられない光景を目にする。副村長の家が解体作業の真最中であった。昨日、明日は忙しいからインタビューの手伝いができないと言っていたが、それが家の解体とは思ってもしなかった。私も落合さんも、大みそかに家を解体するという彼らの行動が理解できない。

解体される家の回りに子供が何人も集まっていて、壁や柱を倒す度に、その廃材に群がっていた（図10）。薪の収集は子供の仕事なので、ここで廃材を集めることができれば、今日は薪を集めるために森に行かなくてもよいのだ。子供たちにとっては、遊ぶ時間ができるということである。

昼過ぎにインタビューが終わるが、いつも食事を用意してくれていた副村長が家の解体・建築という重要な作業を行っているため、何時になっても、誰も食事を用意してくれない。仕方がないので、自分たちで作ることにした。といっても何もないので、朝ご飯の残

図10 副村長の家の解体と材木を運ぶ子供たち

りをもらい、落合さんが日本から持ってきたインスタント豚汁2袋と塩コンブ、そしてトンサワンさんがムアン・サイで買った中国製のパテをおかずとして食べた。

食後、インタビューが終了したので水浴びをして、洗濯をした。水浴びは2日ぶりである。やはり水が冷たい。しかし、風呂に入らず新年を迎えるのは避けた。比較的暖かい日だったので、水浴び後はさっぱりして気持ちいい。休憩後、3人でこれまでのインタビューシート42枚の集計を行う。副村長はまだインタビューしていないが、あと4日間はこの村にいたので多分大丈夫だろう。集計にかなりの時間がかかり、終盤は暗くなり、皆で懐中電灯を使いながら何とか終わらせた。6時半であった。

気になっていた副村長の家を落合さんと見に行くと、何事もなかったかのように完成していた。家の解体から建築まで1日で終わるとはすごい。日本人にとって大みそかは特別な日だが、彼らにとっては普通と同じ日のようだ。

夕食前、Kさんと世間話をしていて、何故か双子の話になった。30年ぐらい前まで、双子はピー（霊）と同じということで殺していたらしい。私も落合さんもこの話には驚いた。この村にも4～5年前、双子が生まれたが、その親はその子を育てたくないということで養子に出したらしい。日本人との考え方の違いには驚く。

夕食は至って普通であった。いつもと同じくラオ・ラーオを2杯あおってから食事が始まる。落合さんと、今頃は日本では紅白歌合戦を見ているのだろうか

と話しながら、いつも通り8時半に床につく。外で子どもたちが広場で遊んでいる声を耳にしながら眠りにつく。今年も無事に1年が終わった。

6. 2007年1月1日（月）

正月は仕事を休むことにしていた。長期の調査では休暇も必要だ。普段と同じく8時半に朝食をとり、その後、正月のプレゼントとして、ビエンチャンで購入したカレンダーを村長に2枚、Kさんに1枚、副村長に1枚あげた。また人だかりができた（図11）。このプレゼントは、思っていた以上に好評であった。意外なことに、カレンダーの女性よりも、その背景の滝などに皆の興味が集まっていた。

今日は、皆でビールを飲みに行く約束をしていたので、ひと休みした後、落合さん、トンサワンさん、Kさん、そして私の4人でパーク・ナムノイに繰り出した。途中の道端で植物標本をいくつか採取し、約1時間後にパーク・ナムノイに到着。入口で警察のチェックに遭った。何のために村に滞在しているのかを聞かれたが、トンサワンさんが持っていたパイ・サヌー（調査願い）¹²⁾を見せると、何も問題なかった。

パーク・ナムノイは、県庁所在地のボンサーリーに行く道とベトナムのディエンビエンフーへ行く道の三叉路に位置し、バスの乗り換え地点でもあるので、雑貨店や食堂が数軒立地している。その三叉路には新しく中国の民間企業の看板が建てられていた（図12）。ケシ代替作物として、ボンサーリー県のコア郡とマイ郡にパラゴム40 ha、14,000本の苗を植えるを書いてある。実態を知らない人が見たら、すごく良いことをやっていそうに見える。しかし、私には植民地化のよ

うに感じた¹³⁾。また、昨年まではなかったゲストハウスが1軒オープンしていた。

一番きれいな店に入って、ビールの大ビン2本を注文。タラの燻製とポテトチップスも注文した。久しぶりのビールはおいしい。さらにビールの小瓶を2本追加で注文。Kさんと世間話をしていて、村長の家にいる「居候」の話になった。去年はいなかったのに、ずっと気になっていた。H村と同じ民族のR村で妻に捨てられて居場所がなくなった人らしい。彼はアヘン中毒者で、村長が面倒を見ているということである。

ビールを飲んだ後、コーヒーなどの日用品を買い込んだ。私は、日本から持ってくるのを忘れた鏡を1000キープ（当時のレートで約10円）で購入。そのあと、川沿いの食堂で昼食をとった。トンサワンさんが魚を食べたいということでティラピアのスープを作ってもらうことになった。ラオ人らしく、ラオ・ラーオが必要だということで、1本買って飲む。赤米も出てきて、満腹になるまで食べた（図13）。

図12 中国の民間企業のケシ代替作物導入プロジェクトの看板

図11 カレンダーに見入る村人たち

図13 正月の外食

再び歩いて村に帰ってきた。まだ昼の2時だったので水浴びをした。今日は、仕事をしないつもりだったが、落合さんと相談して、明日から森へ行く前にインタビューで出てきた植物名をアイウエオ順に並べ替えて集計することになった。集計し始めると、私たち2人のアカ語のインタビューがかなり怪しいことが判明した。同じ植物名と思われるが、微妙に違うものが多いことも登場する。残りの3日間で統一しなければならない。

今日は正月ということもあり、夕食の時間はラオ・ラーオ2杯だけでなく6杯飲んだ。トンサワンさんがパーク・ナムノイで食事した時に飲んだラオ・ラーオがおいしいということで、もう1本購入していた。それを皆で飲んだ。いつもよりちょっと酔って気持ち良い。ラオの村と違ってアカの村は酒の量が少なく健康的である。昨日と同じく広場では女の子たちが歌いながら踊っていた。

夜は村長宅の軒下でトンサワンさんと語り合った。ラオスの開発の話で、郡レベルの役人の能力を上げなければならないということで意見が一致。彼はスウェーデンで修士を取得しており、現実がよくわかっている。9時に床に入る。

7. 2007年1月2日（火）

6時45分に起床。いつものようにコーヒーを飲み、それから朝食。今日から森に出かける。9時少し前に、落合さん、トンサワンさん、村長、Kさん、そして私の5人で村を出発。1年ぶりにGPSを使用。今日は、長期休耕地、古い森、今年焼畑をしたところがメインのルートである。昨年、雨の中であつぽ濡れで歩いたのが嘘のようで、地面は乾いており、すごく歩きやすい。私は日本からトレッキング・ポールを持参したが、今年は、必要なかった。

昼頃に今年の焼畑耕地に到着。稲刈り後、約3ヶ月しか経っていないのに、新しい草木が一面に生えていて、その多様性に落合さんと共に驚く（図14）。本当に焼畑は人為的な植生更新の一つの手段であることを実感する。時間があればコドラトを取って植生調査を行いたいと思ったが、残念ながらそれをする時間はない。焼畑耕地だけで、新たに16の植物を採取した。落合さんが植えられているジュズダマ¹⁴⁾を見つけて

図14 稲収穫3ヶ月後の焼畑耕地

図15 ジュズダマ

大興奮（図15）。レアな種類らしい。いろいろな角度から写真を撮り、標本を取って満足そう。私はハトムギとジュズダマの違いはわかるが、ジュズダマの細かい違いは全くわからない。

昼食はいつもより遅く2時半ごろに焼畑耕地から少し下ったところの小川の脇でとることにした。村長の家から持ってきたご飯1袋、トンサワンさんがパーク・ナムノイで昨日買ったシカ肉の燻製、そしてチェオ¹⁵⁾、落合さんの塩コンブをバナナの葉の上に広げてのピクニックである。遅い昼食だったので、皆お腹が空いていたのか、がつがつ食べた。

昼食後、山を下る。だんだんと村が近づいてくるのがGPSのデータからは分かるが、村は全然見えない。急に開けたところに出ると、村の全体が一望できた（図16）。これまで4年間、この村に通っていたのに、こういう風景を見るのは初めてだった。小さな美しい村だと感じた。

村に戻ってきたのは、4時半である。まだ日が出ていたので、とりあえず、すぐ水浴びした。トンサワン

図16 村を一望する

図17 焼畑休閑地での放牧

さんもすぐ水浴び。だけど落合さんは標本整理があるので身体を拭いただけで作業に取りかかる。私は水浴びといっしょに、これまでラオスに来てから一度も洗濯していなかった厚手のトレーナーを11日ぶりに洗った。真黒な水が出て、こんなに汚いものを着ていたのかと驚く。

水浴び後はKさんとトンサワンさんといっしょに植物名のアカ語のチェックをしたが、全然終わらない。落合さんも標本整理が終わらない。最も重要なインフォーマントのKさんを私が占有してしまっていたのが作業を遅らせてしまったようだ。落合さんちょっと不機嫌。夕食の時間になっても、結局、私も落合さんも作業が終わらない。懐中電灯をつけながらの作業はかなり効率が悪い。しかも夜はやたらと寒い。

夕食は、タケネズミ2匹の肉が出てきた。タケネズミの肉はおいしい。肉だけでなく、血のラーブ¹⁶⁾やスープにも調理された。しかし、血のラーブはトンサワンさんが食べたら、匂いがきついと言うので私は遠慮した。夕食後に、作業を再開。落合さんも私も9時頃まで作業をして終了。私は一つの植物名を除いて、何とかアカ語とインタビューシートのデータを合わせることができた。明日は昼食前までに森から帰ってくるということで3人の意見が一致した。夜の作業は暗くて効率が悪いだけでなく寒い。9時15分に床につく。

8. 2007年1月3日（水）

6時45分に村長の2番目の妻が綿花を叩く音に起こされる。森に入ったせいか、夜中に一度も目覚めるこ

となく朝まで一気に寝た。この村に来てから、夜中に目覚めないで朝まで寝たのは初めてであった。相当疲れていたのだろう。

朝食後、8時半すぎに、昨日と同じメンバーで森に入る。今日のルートは、休閑地2～3年と川沿いである。しかし、川沿いのルートは時間がかかるので諦めて、焼畑耕地と休閑地2～3年のルートにした。約1時間半後、焼畑耕地に到着。牛の刈跡放牧が行われていた（図17）。そのせいだろうか、昨日の焼畑耕地よりは、植物個体数が少ない。牛が若芽を食べるからなのか。

出小屋には水牛を放牧していた女性がいたので、彼女もいっしょに村に戻ることにになった。彼女は村で唯一の助産婦である。植物にも詳しく、Kさんが一生懸命探しても見つけれなかったカジュルマ¹⁷⁾という植物を彼女は探し出してくれた。

1時半に村に戻る。すぐに水浴びに行くが、村に2か所ある水場のうち、1か所の水が出ない。1つの水場に人が集中しているので、空くまで少し待つ。今日は比較的暖かく（と言っても水は冷たい）水浴びはそれほど辛くはなかった。

村人が昼食を作ってくれる気配がないため、自分たちで作ることにする。日本から私が持ってきたモチと落合さんが持ってきたかつお節とダシの素でお雑煮を作る。具はモチだけ。モチを焼いてから入れたいのだが、ここには網が存在しない。したがって、竹に挟んであぶり焼きにした。味はかなりいいけている。トンサワンさんは出汁がおいしいと言って、ご飯を入れて雑炊にして食べる。村長は、「ホト」と呼ばれる彼らが

つくるモチよりも伸びるのが面白らしく、何度も伸ばして遊んでいた。これでやっと新年になったという気分。

昼食後、森を歩いていた疲れと昼食後の満腹感で眠くなる。落合さんが15分ぐらい昼寝。私も少し寝た。しかし、まだ仕事が残っていたので、植物名のアカ語の最終チェックを行う。落合さんは、今日採取した標本の整理。仕事が全部終わったのが5時少し前であった。この村での調査は終了。

外はまだ明るかったので、落合さんはトンサワンさんと一緒に昨日焼畑で見つけたジュズダマを植えていた人のところへインタビューに行く。私は林産物仲買人のGさんにインタビューを行う。村の入口に新しく建てられた倉庫も彼が建てたものだ。道沿いに倉庫を建てたことによって、毎日、町の仲買人が集荷に来てくれるようになったと言う。他の村の林産物仲買人と同じくGさんも買い取った林産物が何に使われているのか全く分かっていなかった。ほとんどの林産物が中国に輸出されているのだが、その流通の最も末端に位置する商人である。

夕食には、イエートゥ・イエーマ¹⁸⁾という花が出てきた(図18)。「食べる花」である。味はまあまあ。少し苦い。調査最終日の夕食ということでラオ・ラーオを5杯飲んだ。

夕食後、トンサワンさんが「長老を呼んで、簡単なお礼のパーティーをしたほうが良いと思うが、どうか?」と聞いてきた。私も落合さんも快諾。その話をどこからともなく聞きつけた村人が、続々と村長宅に集まりだした。2つの机にラオ・ラーオ、ビール、マーク・コ(小さい栗)、川のり、卵、キャンディーなどが並べられた。トンサワンさんがアカの伝統的な民族衣装を着てくれと村人に頼むと、若い女性3名が民族衣装を着てくれた。

夜9時に宴会がスタート。未婚女性の歌が披露される。後ろで年配の女性が、歌が間違っていると指摘している。Kさんに聞くと、昔と比べたら若い世代は、歌をよく知らないと解説してくれた。それでも聞いている側は楽しい。歌の後は、若い女性たちが家の前の広場でダンス。これは、日本の「カゴメ・カゴメ」のような踊りで、輪になって歌いながら回るもの(図19)。3人ずつ組になり、向かい合って行ったり来た

図18 食用花 イエートゥ・イエーマ

図19 村の娘たちのダンス

りする踊りを披露してくれた。その後は、30代の男性の歌である。歌の内容は、中国から移住してくる過程や、昔は水田を営んでいたこと、そして恋に関係するものだという。リズムが独特で、歌の途中で、回りから掛け声が入る。最後に村人から日本の歌を聞きたいというリクエストが入り、落合さんが「島唄」を熱唱して、宴会の幕が下りた。終わったのは夜11時少し前。滞在中で最も遅い就寝となった。

9. 2007年1月4日(木)

今日も村長の2番目の妻の綿花を叩く音に起こされる。時計を見たら、朝6時。しばらく布団の中にいたが、6時45分に起床。顔を洗ってヒゲを剃る。日本から持ってきたヒゲソリの替え刃が古いものしかなく、全然剃れない。

朝食はインスタントラーメンと米だけ。あまり食が進まない。山を下りる準備をして、皆に別れの挨拶を

済ませる。荷物を持つのを手伝ってくれる3人と共に8時45分に下山。約15分で道路に出る。事前に手配していた車が待っていた。車に乗り込んで、次の目的地のウドムサイ県M村に向けて出発。

IV 解説

H村の滞在は、4年連続4度目であった。調査の前には、日本からラオス農林省の研究者に連絡して、調査関係書類の準備、調査同行者の選定、車の手配などを依頼する。ラオス国内の調査アレンジについては、基本的にラオス農林省が行う事になっており、農林省から郡の農林事務所には事前にFAXを送り、日本から研究者が来る事が伝えられている。ところが、郡の農林事務所から村に事前に連絡が入っていたことは、これまで一度もなかった。今回も村人たちは、私たちの訪問を全く知らされていなかった。したがって、我々の訪問は、いつも突然である。にもかかわらず、嫌な顔もせず、暖かく迎えてくれるH村のアカの人々には、本当に感謝している。

はじめて訪問した時は、電気が来ていないのでノートPCのバッテリーがなくなれば、それで仕事ができなくなるのではないかと不安に感じた。しかし、何度か行くうちに、電気は調査に必要不可欠なものではないことに気がついた。ノートPCはプリントアウトする時だけ使うだけで用が足る。携帯電話の電波も届いているが、そもそも電気がないので、バッテリーが切れたら充電できない。したがって、ここでは電子機器は無力である。ペンとノートさえあれば、フィールド調査は可能なのだ。

また、食事に関しても、缶詰やインスタントラーメンなどの補助食料を持ち込めば、米、野草、そして野生動物の肉は村で調達できるので、何とでもなる。そして、それらの現地食材を筆者らが村人から買うことによって、微々たる額だが、村人の収入にもなる。夕方になると、私たちが宿泊している村長の家に、子どもたちが森で捕まえてきたリスやタケネズミなどの小動物を売りに来る。それを品定めして、価格交渉をするのが、いつもトンサワンさんの役目だった。

子どもたちは、毎日森に出かけて、いろいろなモノを採ってくる。それは生きるためというよりも、むし

ろ遊びの延長であろう。筆者も子供の頃は、山でクワガタを捕ったり、野原でキリギリスを捕ったり、また両親と一緒に山菜を採りにいった経験があるが、それは飼うためとか、食べるためではなく、昆虫を捕る、山菜を採るという行為が純粋に楽しかったからである。現地では、豊かな自然環境の中で、そのような「遊び仕事」が子どもたちによって盛んに行われていたのが印象的であった。

この時の調査で唯一辛かったのは、水浴びである。乾季の一番寒い時期の調査で、しかも村が位置していたのは標高約800 mの丘の上で、日中でも霧がかかることが多かった。天候ばかりはどのようなもので、できるだけ気温が上がる日中に水を浴びることにしたが、それでも寒かった。

さて、2006年末の調査では、村長がパラゴムを植えようとしていたり、また村の入り口に倉庫をつくって林産物などを売ろうとしていたり、過去3年間の調査では見られなかった大きな変化が起こっていた。どちらも、中国の経済進出に関係した変化である。しかし、残念ながら、総合地球環境学研究所のプロジェクトが終了してしまったため、H村を訪れる機会がなく、どのようなになったのか、事後の変化を調査していない。

この日記を書いた翌年、2008年12月に科研費の調査でラオス北部の別の地域を訪れた。そして、国道4号線を車で走っていて、H村の入り口にさしかかった時、Gさんを見つけた。村まで歩いて行きたかったが、時間がなかったため、車を止めて道路脇でGさんと立ち話をした。わずかな時間であったが、私たちが帰った後に、村長が昨年整地した土地にパラゴムを植えたこと、また村長の第一夫人の調子が再び悪化し、結局亡くなったことを教えてくれた。4年間のH村滞在中、村長の第一夫人には、本当にお世話になった。彼女のご冥福をお祈りするばかりである。

その後、2012年3月と2013年3月にラオス北部を訪れた際、H村付近には、パラゴムの植林地が広がっていたのを見た。Google Earthで確認すると、2007年の調査時点ではまったくなかったパラゴム植林地が、2011年の衛星データでは、集落の周辺に少なく見積もっても20～30ヘクタールほど広がっている。住民が自ら植林したものなのか、それとも、中国企業が土

地を借りてコンセッションの形態で生産しているものなのか分からない。しかし、焼畑ができなくなるパラゴム植林地のような土地が増えることによって、休閑期間が短縮し、植生も変化することは容易に予想できる。

このような土地利用変化は、H村のアカの人々が選択したものなのか、それとも別の圧力によるものなのか不明であるが、どちらにしろ、調査中に見られたような、有用植物の利用は確実に衰退するであろう。また、今後の知識の継承にも大きな影響を与える可能性がある。伝統的な生態知識は、ほんのわずかな開発でもすぐに消えてしまう脆弱性を持ち合わせているのである。

注

- 1) なお、公開に際して、誤字脱字、不適切な表現、分かりにくい記述など、原文を損なわない範囲内の最低限の修正および校正を行った。
- 2) 落合雪野さんには、調査中に日記をつけることに對して事前に告げており、また、本稿を投稿するにあたり、内容の確認をしていただいた。
- 3) ラオスでは一般的なヌードル。米粉にデンプンを混ぜた麺に、鶏ガラなどで出汁をとったスープが特徴である。
- 4) アカは一夫多妻を認める民族であり (Lewis 1970: 809–811), H村の村長は二人の妻を持つ。しかし、村で複数の妻を持つのは、裕福かつ実力のある村長だけであり、誰でも複数の妻を持っているわけではない。
- 5) ラオスでは、遠隔地の村に学校がないことが問題視され、NGOなどによって学校の建設が行われている。しかし、問題は建物だけではない。遠隔地に赴任する教員が居ないことも大きな問題である (乾 2004: 95–105)。H村でも、任期が終了した後に、後任の教員が着任してくれるかどうかかわからない状況である。
- 6) H村には電気がない。したがって、小川に小さな水力発電機を設置して電気を家に引いている。しかし、発電機を購入する資金を持ち、それをメンテナンスできる世帯は限られる。
- 7) 村民は、村内に2か所設置されている水場で身体を洗う。水場は、森の中の湧き水を引いてきたものである。私たちが村で滞在している間は、村民と一緒に水場で身体を洗っていた。しかし、12月のラオス北部の山地部は、日中でも気温が15度ぐらいしか上がらないことが多く、水浴びするには非常に寒い。
- 8) 決してウソをつくような人ではないが、物事を大げさに伝える傾向があるので、私と落合さんは、彼のことをそのように呼んでいた。
- 9) 「バーシー・スー・クワン」が正式な名称。幸福、健康、繁栄を祈願する儀式である。詳細は、増原 (2003) および虫明 (2010: 240–243) を参照のこと。
- 10) マメ科グズ属 (*Pueraria* spp.) の繊維である。
- 11) 標本が採取できなかったので、未同定である。
- 12) ラオスで村落調査を実施するには、政府機関が発行する公式書類が必要である。私たちの研究プロジェクトでは、農林省の国立農林業研究所がカウンターパート機関であったので、農林省から「調査願い」が郡の農林事務所宛に発行されていた。
- 13) 当時、ラオス政府が国連の協力を得ながら、ケシ撲滅のプロジェクトを実施していたため、ケシ栽培は調査地ではほとんど行われていなかった。したがって、パラゴムの導入をケシの代替作物という位置づけで捉えるのは不適切である。
- 14) イネ科ジュズダマ属 *Coix lacryma-jobi*。ハトムギは、ジュズダマの栽培種である。実の中心に穴が空いており、糸を通すことができるので、ラオスの少数民族は、ネックレスにしたり、服に縫い付けたりして、装飾品として利用する。しかし近年、プラスチックの代替品が出回るようになり、装飾品としてのジュズダマ利用が衰退している (落合 2014)。
- 15) チェオとは、トウガラシ、魚醤、塩、香葉をベースにしてつくられる調味料で、モチ米を主食とする民族の食事には必ず出される (森枝 2005: 177–212)。季節の野菜を入れたり、また、虫を入れたりすることもある。
- 16) ラープとは、ひき肉を魚醤、トウガラシ、ライム、炒った米などと和えた伝統的なラオス料理である。この記述のように、血を混ぜることもあ

る。

- 17) シソ科ムラサキシキブ属 *Callicarpa rubella* Lindl.
頭痛やめまいがするときに葉を潰して水と混ぜて
飲む薬草である。
- 18) ノウゼンカズラ科マクハミア属 *Markhamia stipu-*
lata の花。詳しくは落合他 (2008) を参照のこと。

文 献

- 乾 美紀 2004. 『ラオス少数民族の教育問題』明石書店。
- 落合雪野 2014. 着る。落合雪野編『国境と少数民族』169-197. めこん。
- 落合雪野・横山 智 2008. 焼畑とともに暮らす。横山 智・落合雪野編『ラオス農山村地域研究』311-347. めこん。
- 落合雪野・小坂泰之・齋藤暖夫・野中健一・村山伸子 2008. 五感の食生活——生き物から食べ物へ。河野泰之編『論集モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ— 第1巻』203-224. 弘文堂。
- 増原善之 2003. パーシー。ラオス文化研究所編『ラオス概説』253-255. めこん。
- 虫明悦生 2010. パーシー儀礼——手首にまかれる白い糸。菊地陽子・鈴木玲子・阿部健一編『ラオスを知るための60章』240-243. 明石書店。
- 森枝卓士 2005. 『世界の食文化4ベトナム・カンボジア・ラオス・ミャンマー』農山村文化協会。
- 横山 智 2014. ラオスと中国の国境域。落合雪野編『国境と少数民族』134-165. めこん。
- 横山 智・落合雪野 2008. 開発援助と中国経済のはざま。横山 智・落合雪野編『ラオス農山村地域研究』361-394. めこん。
- Chazée, L. 1999. *The People of Laos: Rural and Ethnic Diversities*. Bangkok: White Lotus.
- Lewis, P. W. 1970. *Ethnographic Notes on the Akhas of Burma Volume IV (HRAFlex A04-001)*. New Haven, Connecticut: Human Relations Area Files.

〈著者略歴〉

横山 智 (よこやま さとし)

1966年 北海道生まれ。現在、名古屋大学大学院環境学研究科教授。博士(理学)。著書に『納豆の起源』(2014年NHK出版)、編著に『資源と生業の地理学(ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第4巻)』(2013年海青社)等がある。

公式ホームページ <http://www.geog.lit.nagoya-u.ac.jp/yokoyama/>